

ズッコケカメラの肝



たくき よしみつ

1

1 普通のデジカメでプロ並みの写真を

新連載の始まりです。デジタルカメラでの写真撮影から、撮った写真画像の編集・活用まで、毎回、実例写真をもとに、役に立つアドバイスをしていきます。

今日はひな祭り。妻が創ったひな人形を、わが家の食堂の床に置いて撮ってみました。

連載初回ということで、写真は結構気合いが入りました。面白さを狙って、わざと斜め下から撮り、全体が暗かったので、画像ソフトでスポットライトの効果を後から付け加えました。

プロっぽい写真ですが、使用しているカメラは一眼レフではなく、普通のレンズ一体型デジカメです。お金をかけずとも、こんな写真が撮れる・作れるという実例として見てください。



●コニカミノルタDiIMAGE A200 F3.5 1/20秒 20.8mm 露出補正-0.4

●人形：鐸木郁子(木の鐸会)

☆A200というカメラは、低い位置での接写が得意で、動かない被写体であれば、一眼レフより面白く、クオリティの高い写真が撮れることが多かったです。

明るいレンズ（F2.8-3.5）とバリアングルモニターの強みですね。

シャッター音を消せるので、昆虫や小動物の接写にも向いていました。

ただし、今のカメラと比べると、反応速度が極端に遅いので、動く被写体は不得意でした。

2 見せたいものだけを思いきって大きく

この写真の解像度は896×717ピクセルです。画素数で表せば、64万2432画素。新聞に掲載されたときの実寸は65×52mmでした。

掲載枠が小さかったので、毎回、写真をぎりぎりまでトリミングし、編集部に送るときも、解像度を落としていました。

コラムの限られたスペースでは、大きな写真は載せられなかったのです。

みなさんが撮った写真をプリントするときは、L判サイズ（127×89mm）が多いと思います。この写真よりは大きいものの、雄大な風景写真などをプリントすると、迫力が失われてがっかりするはずです。

そう、これが写真というものの宿命なのです。でも、限られた四角形の中に、見せたい対象をいかに魅力的に切り取って収めるかを工夫することこそ、写真の醍醐味でもあります。

余分なものは極力削ぎ落とし、見せたいものだけを大きく写しましょう。

今回の写真は犬の表情がすべて。特に目の表情を伝えるためには、このくらい大きく写さないとダメです。あれもこれも入れようとする、つまらない写真になります。



●ニコンD70 85mm/F1.8 F2 1/250秒 露出補正 -1/3

3 望遠ズームを使いもっと楽しもう！

<h2>望遠ズームを使いもっと楽しもう！

</h2>

ベランダにやってきたキセキレイです。

前回「見せたいものだけを大きく写そう」と書きましたが、野鳥のような近づくことのできない相手は、望遠レンズで撮るしかありません。

今回の写真も、一眼レフではなく、普通のレンズ一体型デジカメで撮っています。レンズの倍率は焦点距離（単位はmm）で表されますが、デジカメは像を結ぶ部分（撮像素子）の面積がカメラによって違うので、同じ「〇mm」のレンズでも、実際に写る大きさはまちまちです。

比較できるように、普通は「35mmフィルム換算で35～200mm」などと表され、この数字が大きいほど望遠性能が高いレンズです。

例えば、今回の写真はズームレンズの望遠端（焦点距離50.8mm）で撮っていますが、35mmフィルム換算だと200mmに相当します。

高倍率の望遠ズームが使えると、写真の楽しみがぐんと広がります。

<HR noshade>

●KONICA MINOLTA DiMAGE A200

1/250秒、F4.5、ISO 100

50.80 mm (200mm)



クリックで拡大

子供はなるべく低い目線で撮る

子供ができると、親はみんな熱心なカメラマンに変身します。でも、小さな子供の生き生きした表情や予想のつかない動作をうまく写真に収めるのはなかなか難しいものです。

ひとつだけヒントをさしあげましょう。それは、なるべく低い目線で撮るということ。子供は地上数十センチの世界で動き回っています。撮影する大人が立ったままでは、上から見下ろした写真しか撮れません。

地面や床に横になるくらいの気持ちで、カメラを低く構えて撮ると、ぐんと面白い写真になります。

今回の写真は、階段の下から見上げるという特殊な状況で撮りましたが、おかげで表情をうまく捉えることができました。



●SONY CYBERSHOT F707
1/30 秒、F2.0、ISO 200 9.70 mm

モデル:大塚楽人君 (0歳)

同じ対象を何枚も撮ることが大切！

先日、十数年ぶりに動物園に行きました。これは、幅1メートルほどの溝を隔てて飼われているインドゾウの雄と雌が、顔を寄せ合って愛を交歓している姿です。切ないものがありますが、ひたすらシャッターを押しました。

デジカメはお金の心配をせず、何枚も撮れるのが最大のメリット。この日も、3時間で900枚以上、ゾウだけで80枚以上の写真を撮りました。これだけ撮れば、1枚くらいはいい写真があるものです。

フィルム時代の「もったいない」感覚が捨てられず、一つのシーンで一度しかシャッターを押さない人がいますが、それこそ「もったいない」ことです。失敗写真を量産しながら、腕を上げていきましょう。



● NIKON D70+タムロン18-250mm/F3.5-6.3

1/100 秒、F 5.60、絞り優先、92.00 mm (35mmFilm換算で138 mm)

ワンポイントになるものを見つける

みなさん、桜はもう見ましたか？ 満開の桜は生で見ると感動的ですが、写真に撮ると、迫力がなくなり、がっかりすることが多い被写体の代表です。ましてやこのコラムのスペースでは、桜の木の全体像を漫然と写した写真など、小さくなってなんだか分からなくなるでしょう。

そこで、今回は「ワンポイントになるもの」を探すことの大切さについて書きます。

この写真では、地蔵ですね。桜の木だけ撮ればつまらない写真になりますが、そばの地蔵を無理矢理入れて下から撮ることにより、面白くなりました。

こんなふうに、風景を撮るときは、ワンポイントになるものや、組み合わせると面白い被写体を探してみましょう。



●KONICA MINOLTA DiIMAGE A200

1/200 秒、F5.0、ISO 50、10.30 mm (40 mm)

デジカメはレンズの明るさで選べ！

2000年4月、上野鈴本演芸場でトリをつとめる林家しん平師匠です。この写真の解像度は48万画素しかありません。

当時のデジカメはVGA（640×480ピクセル＝30万7200画素）が撮れば上出来で、今のようにコンパクトデジカメが1000万画素をうたうなど、考えられませんでした。

しかし、小さな撮像素子（フィルムに相当する部分。CCDやCMOS）のまま画素数だけ無理矢理多くしても、1画素あたりが受け取れる光量が減り、画像が汚れるなどの弊害が出ます。

重要なのは画素数よりもレンズの明るさです。レンズの明るさは「F値」という数字で表され、数値が小さいほど明るいレンズです。このデジカメはF2.0-2.8という明るいレンズを持っていたため、暗い寄席でも、フラッシュなしでこの程度の写真が撮れました。

さて、みなさんがお持ちのデジカメは「明るいレンズ」がついていますか？

暗いレンズ+小さいサイズなのに高画素CCDという組み合わせのカメラは最悪です。



角度可変液晶の一眼レフに拍手

デジタル一眼レフカメラは、液晶モニターで被写体を確認しながら撮影できないのが弱点でした。ところが最近、モニターを見ながら撮影できる「ライブビュー機能」を実現したデジタル一眼が出てきて、この弱点が消えつつあります。

さらには、液晶モニターの角度を変えられ、下から仰ぎ見る角度や、頭上に掲げたカメラから見下ろす撮影を可能にしたモデルも登場しました。

今回の写真は、草むらの中でカメラを地面の位置まで下げて撮っていますが、このような写真はファインダー撮影では極めて難しいものです。

どんなに高性能でも、角度可変モニター（バリアングルモニター、フリーアングルモニターなどとも言います）を使わなければ撮れない写真というものがあります。

角度可変ライブビュー液晶モニター搭載デジタル一眼の登場に拍手！



●SONY DSLR-A300 (α300) +SONY 18-250mm
1/25 秒、F 6.3、ISO 400、250 mm (35mmFilm換算 375 mm)

思いきった角度で撮ってみよう！

春まだ遠い阿武隈の我が家。家の前の雑木林に入り、カメラを空に向けて撮りました。

これはよくやる手法で、ズームレンズを広角（WIDE）側にして、樹木やビル、塔などの真下から上を見上げるようにして撮ると、面白い写真になります。普段見慣れている光景が一変し、写真の楽しさを再発見することでしょう。

こうした撮影では、ファインダーを覗かなければならない一眼レフよりもレンズ一体型デジカメが有利ですが、さらには、液晶モニター部分の角度が変えられるデジカメであれば、圧倒的に有利です。

かつてはモニターの角度が変えられるコンパクトデジカメ（スイバルタイプなどと言います）がいくつもありましたが、ほとんどが製造中止となりました。

角度可変モニター機能は売れ行きに関係ないとメーカーが判断したからでしょうが、ぜひ復活させてほしいものです。



● PENTAX K100D+タムロン18-250mm

1/250 秒、F7.1、ISO 200、露出補正 -2/3、18 mm (27mm相当)

露出を変えて何枚も撮る

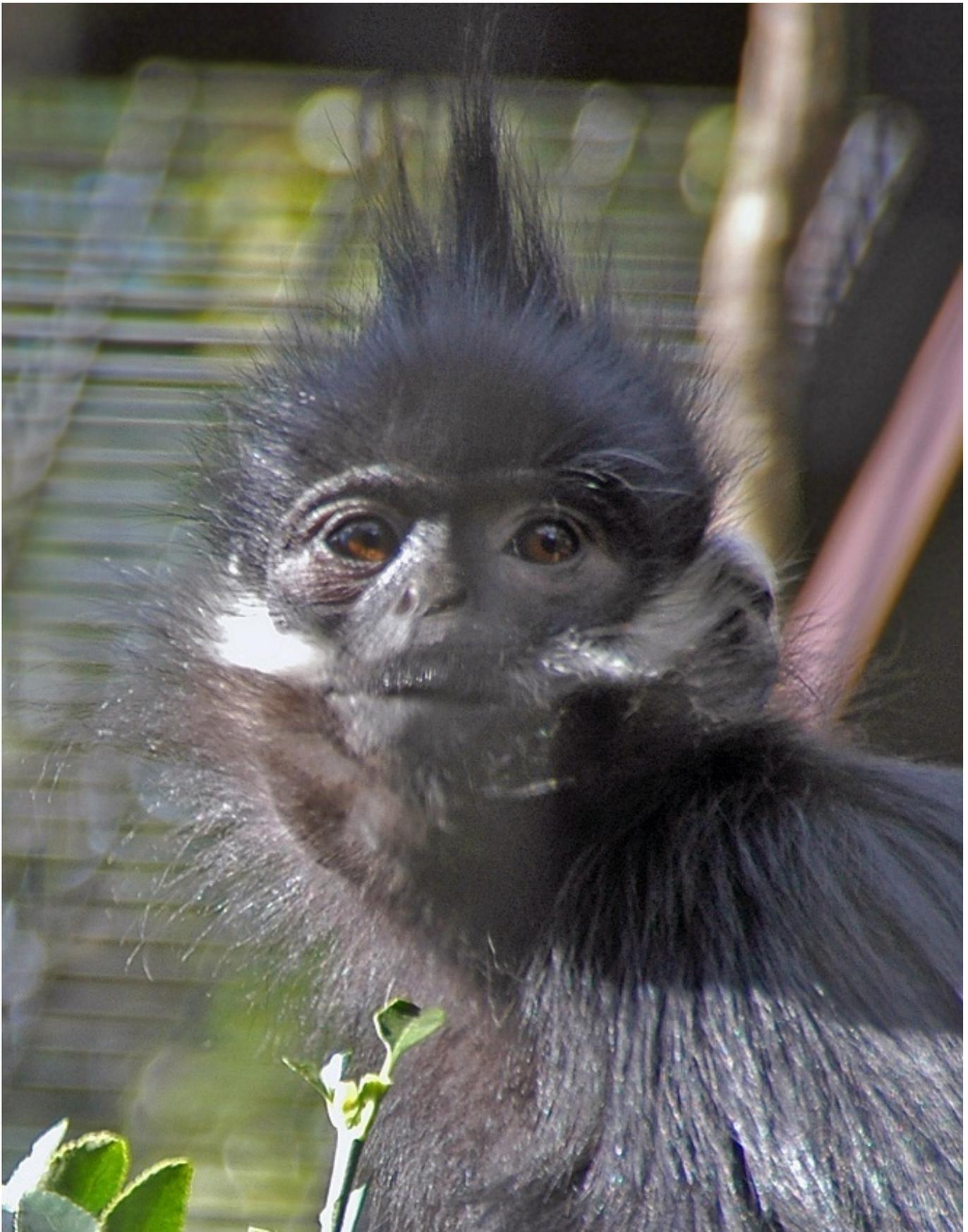
フランソワルトンというサルです。オシャレな名前にたがわず、ヘアスタイルが決まっていますね。赤ん坊のときは鮮やかな金色ですが、成長するとこのように真っ黒になるとか。

この写真は動物園の檻の奥にいるところを望遠レンズで撮りました。手前にはもちろん格子がありますが、うまくぼけてくれました。暗い檻の中にいる黒いサルを撮るのですから、きれいに写すのは至難の業。たいていは真っ黒で何が写っているのか分からない写真になります。

こんなときは露出を何段階かに変えながら何枚も撮っておきましょう。

多くのデジカメには、自動的に露出を変えて、標準より暗め、標準、明るめの写真を連続して撮る「オートブラケット」という機能がついています。これを利用すると、自動的に露出の違う写真が連写できます。

後から後からいちばんよいものを選べばいいのです。連写すると、手ぶれもしにくくなり、いいことだらけです。



● NIKON D70+タムロン18-250mm
1/80 秒、F 6.3、250.00 (375mm相当)

フラッシュは極力使わないで撮る！

読者のかたから「私は髭が濃く、眼鏡をかけているので、いつも写真写りが悪いのです」というご相談がありました。

それは多分、室内でフラッシュを使って撮影しているからです。

免許証用のインスタント写真で、いい男・いい女に写る人はいませんね。フラッシュを正面からあてれば、毛穴まで写ったテカテカ顔になるのは当然です。

そのため、プロカメラマンは、室内撮影では何個もの大型ライトを使って間接照明を演出したり、苦勞しています。

私たちアマチュアはそんなことは無理ですよ。ですから、室内で人を撮るときは、手ぶれを恐れず、内蔵フラッシュを使わずに撮るという「決意」がなにより大切です。

そのためにも、少しでも「明るいレンズ」のデジカメを選ぶことが重要なのです。

今回はデジタル一眼レフ専用レンズとしては最も明るい（F1.4）シグマの30mm／F1.4という単焦点レンズを使っています。これだけ明るいと、暗い室内でも十分に手ぶれしない速さのシャッターが切れます。



●PENTAX K100D+シグマ30mm／F1.4単焦点レンズ

1/60 秒、F1.4、絞り優先、ISO 200、露出補正-2/3、30 mm（45mm相当）